



母袋俊也

青梅、そして「TA・OHNITA」に寄せて

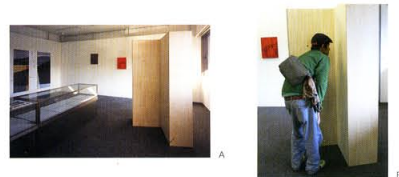
展示室内の意匠に設置された二基の（絵画のための見晴らし小屋）の窓は、「山梨の杉」と「楓の紅」を捉え、横長のフォーマットの窓は杉の幹長感を切り取り、正方形フォーマットの窓では置れていた紅葉も今は赤で満たされ始めている。それぞれの像・Bildは、それらをモデルに描かれた絵画・Bildと異なる関係をつくり出している。

ガラス窓と対面するように展示された「TA・OHNITA」（秋楓）は、初雪の陽光に木々の葉が輝く中、ひっそりとある大宮田地区を歩いた際に空想屋上に出現した水平に伸びる黒い梁の視覚体験と、その梁の柱に同様に置かれた青梅の像をともにも描かれた、僕の仕事場からの青梅入りは、園芸道を日の出で下り峠を越す様

様、すなわち地形に沿った移動である。それは眼下に水平に広がっているだろう青梅を思いながらの視線の運動であり、水平に広がる窓の青梅のそれは、盆地とも台地とも定まらないものだった。思えば、文化とは地形的には水平への拡がりの意味するかも知れない。水平線は大地と空とを分ける。出品作「TA・OHNITA」ではその水平線は、大宮田で垣間見た園芸道が、画面右側で重層性をなしている。

青梅は、水平化の拡張の結果、大都市の周辺部に位置付けられているかの様にも見える。しかし壁中に散見されるレストロスベクティーフにみる後ろ向きな集中性ではなく、絵画の持つ正面的な取り組みこそが、今あるいは向も背向なのではと思われてくるのである。

2007・11 吉川英治記念館にて



左頁 壁並より「M371 Yoshikawa Kaede」コットン・キャンヴァスにアクリル、通彩/「M370 TA・OHNITA」コットン・キャンヴァスにアクリル、通彩（6幅組）右頁 A—正面壁左より「M372 Yoshikawa Kaede」1」コットン・キャンヴァスにアクリル、通彩/「M373 Yoshikawa Kaede 2」コットン・キャンヴァスにアクリル、通彩 B—1幅画のための見晴らし小屋「YOSH-KAWA Kaede」木・H（部2、約平き穴2）C、D—窓「絵画のための見晴らし小屋」YOSH-KAWA Kaede」E—右より「観窓+視点板 YOSH-KAWA 1」木材（視高1137.5cm）/「観窓+視点板 YOSH-KAWA 2」木材（視高1135cm）/「観窓+視点板 YOSH-KAWA 3」木材（視高1145cm）/「観窓+視点板 YOSH-KAWA 4」木材（視高1125cm）F—「観窓+視点板 YOSH-KAWA 4」 G、H—窓「観窓+視点板 YOSH-KAWA」